

阿蘇地域 GGN 申請予備現地審査報告書

審査員：高木秀雄・杉本伸一・廣瀬 亘

期間：平成 25 年 8 月 16～17 日

主な参加者（所属）：蒲島郁夫（熊本県知事）、松永正男（熊本県阿蘇地域振興局長）、佐藤義興（阿蘇市長、阿蘇ジオパーク推進協議会会長）、北里耕亮（小国町長）、吉良玲二（阿蘇市観光まちづくり課長）、藍澤誠也（小国町情報課長）、佐藤登喜子（小国町情報課観光係長）、國谷恵太（阿蘇地域振興デザインセンター事務局長、阿蘇ジオパーク推進協議会事務局長）、郷澄雄（阿蘇地域振興デザインセンター）、石松昭信・片山彰・徳永美紀・山内万里子（阿蘇ジオパーク推進協議会）、池辺伸一郎（阿蘇火山博物館）、渡辺一徳（阿蘇ジオパーク推進協議会学術顧問）、山崎まり子・赤峰健二・緒方 隆・山本セツ・中島一美・中島元比古（阿蘇ジオパークガイド協会）

見学・訪問地点

熊本空港、阿蘇市役所、はな阿蘇美、大観峰、小国町ゆうステーション、遊水峡、阿蘇総合庁舎、JR 阿蘇駅・田園空間博物館、阿蘇火山博物館、中岳火口、西原村役場

現地審査のまとめ

1) 昨年の指摘事項(課題)に対する対応状況

従来型観光と違う「ジオツーリズム」の創出については、33 のジオサイトを結びつけた、テーマごとにまとめられた魅力的なジオツーリズムコースと外国語対応されたコースマップ等が整備されている。ジオガイドも話し手視点から聞き手視点へ解説を再構成しつつあり、わかりやすくするための工夫も随所に見られた。その一方で、難しい内容の看板がまだ散見されること、ガイドツアーの依頼方法や各ジオサイトへの導線整備が進んでいないことといった問題もある。

カルデラをテーマに据えた他のジオパークとの差別化は、ガイドの解説内容や火山博物館での展示などで明確に意識されつつある。ただし、ジオサイトの解説板等でまだ十分にそれが反映されていない場所があることなどまだ改良の余地がある。

2) ジオパークの名称とテーマ

阿蘇カルデラを核とするジオパークである。メインテーマである「阿蘇火山の大地と人間生活」、それらを補完するサブテーマ「巨大カルデラに刻まれた噴火の記憶」「地球の息吹を間近に感じる中岳火口」「火山がもたらした恵みと人々の暮らし」は、阿蘇ジオパークの魅力とそれを支えるジオサイト群のアピールポイントと自然に繋がるテーマであり適切といえる。

3) ジオサイトと保全

阿蘇カルデラの火山活動によって形成されたカルデラ地形と周囲の火砕流台地、そして今も活発な活動を続ける中岳など、火山活動によって生み出された地形群をジオサイトとして観察出来る。また、旧石器時代以降現在まで人類が火山活動とその後の地形・地質や植生等の変遷を捉えて居住地や土地利用を変遷させつつこの地に住んできたことを示す多様な文化的・歴史的サイトも多い。世界の多くの更新世末～完新世カルデラと異なり阿蘇はカルデラ湖がすでに消失し全域が陸域であり、道路網も発達している。このため、カルデラ内が乾陸化していく過程、カルデラからの距離に応じた火砕流堆積物の層相変化やその後の地形変化、それらを人がどのように利用してきたかを豊富な地質学的情報や歴史記録から知ることが出来、この地域の大きなアドバンテージとなっている。また、人が自然に働きかけ千年以上の長きにわたって維持してきた草地は、世界的に見ても大変ユニークである。これらのサイト群は古くからその価値が理解され、国立公園

に指定されるだけでなく、国や自治体、住民や各種団体により地形地質・生態系および景観について保全活動が行われている。

4)教育・研究活動

阿蘇市をはじめ地元の自治体ではそれぞれ、子供達や学生を対象として地域のジオを素材としたユニークな授業や課外活動を積極的に行っており、将来的にはジオパークを支える人材の育成にも繋がると思われる。阿蘇火山博物館は、観光客や修学旅行生、さまざまな研修生に対するジオ教育の場となっているとともに、ジオサイト研究の核であり、ジオパーク協議会事務局との連携も密接である。熊本大学・京都大学火山研究センターとの協力関係も維持されている。

5)管理組織・運営体制

ジオパークの運営主体である協議会事務局は、阿蘇地域デザインセンターと連携しジオパーク運営にあたっている。学術スタッフ、外国語対応可能なスタッフなどの人的面、協議会を構成する自治体からの負担金等、県や地方振興局からの支援により比較的良好な状況で運営が成されている。協議会構成自治体の温度差はまだ埋めきれていないが、各自治体はそれぞれジオパークが地域にとってプラスになるものと認識しており、協議会事務局は各自治体のジオパーク関連事業に協力するなど自治体境を越えるジオパーク活動が展開されつつある。ウェブサイトはレイアウトやデザイン等が洗練されているが、国際的なジオツーリズムに必要な導線の情報、域内の自治体や団体等の教育やツーリズムに関する活動をもっと取りあげ、阿蘇カルデラ全域としての一体感をさらに押し出す必要がある。

6)地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

阿蘇地域ではジオパーク以前から従来型観光に加えエコツーリズム、歴史に関連するツーリズム等特化したツーリズムが展開されており、地域活性化と連動したプロジェクトも存在する。ジオツーリズムの一翼を担うジオガイド協会では、他のジオパークと交流するなかで各地域の活動やジオガイドのよいところを取り入れ、自主的なガイドマニュアル作成、地域の人材掘り起こしなど、この地域のジオツーリズムの底上げや将来的活動を見据えた取り組みを進めつつある。協議会事務局はANAや旅行エージェント等と連携したツーリズム展開を進めており、それらは県のバックアップのもと強力に推し進められている。今後は、ジオガイド協会やエコツーリズム協会所属の他のガイド団体と、ジオパークの学術関係者・地元のさまざまな研究者との橋渡し役・コーディネイト役を協議会事務局がさらに果たしていくとともに、自治体間を越えたジオツアーのさらなる推進などを進める必要がある。

説明版・パンフレットは改善は図られつつあるが、専門用語に頼った詳しすぎる解説、そのサイトで伝えたいことが不明確なものがまだ少なからず認められる。ジオガイド目線、住民目線による記述の確認、そのサイトの売りを明確化したシンプルな記述となるよう工夫する必要がある。JR阿蘇駅に設置されたインフォメーションセンターは、外国語対応やガイドツアー依頼、パンフレット入手などジオパークに関するワンストップサービスサイトとして機能しつつある。ウェブサイト等で、このサイトの存在をアピールすることでさらにビジターへの利便性をはかることができるだろう。ジオパークであることを示すウェルカムサインや、一部主要施設への案内板の整備は進んでいるが、各ジオサイトへの経路を示す案内表示の整備は遅れている。

ジオ関連商品は、食品を中心に各自治体エリアで誕生しつつある。地域の農畜産物を利用した高品質なものが多く、ジオパークロゴシールを貼るなどジオパーク関連商品であるアピールが成されている。

7)国際対応

大観光地であり、アジア系・ヨーロッパ系など世界各地から観光客が訪れている。火山博物館、

インフォメーションセンターなどジオパークの主要施設では外国人対応が考慮されている。地域住民や宿泊施設も外国人対応に積極的だが、それらは既存観光とリンクしたものであり、ジオパークと結びつける取り組みは必ずしも十分に進んでいない。また、ジオガイドの外国人対応をはじめとするジオツーリズムの国際化対応はまだはじまったばかりである。インフォメーションセンターはジオパーク以外のツーリズム客も利用しており、彼らの出身国や来訪目的などをモニタリングすることで、ジオツーリズムの方向性に関する貴重なデータが得られるだろう。

8)防災・安全

この地域では火山活動に伴うリスク、斜面災害に関するリスクが考慮される必要がある。火山については火山ガス観測・警報システムが機能し、外国人対応も含め安全対策が行われている。ただし避難シェルターの老朽化は進んでいるため、補修ないし代替策について検討が必要である。昨年の災害を機に地元では豪雨・斜面災害について意識されるようになっており、博物館による企画展示・学校教育における独自の研究など防災教育が進められつつある。今後はそれらを地元住民やビジターに伝える方策の検討、ジオパークネットワークを利用した災害リテラシーの共有などが行われる必要がある。